

教員名	塩崎 美穂 (SHIOZAKI Miho)
所属	教育事業部
学位	修士 (2000 東京大学大学院教育学研究科)
職名	講師
URL / E-mail	shiozaki.miho@ocha.ac.jp

◆研究キーワード

保育思想史 / 「公立託児所」(公立保育所) / 近代家族 / 児童福祉 / ネオリベラリズム

◆主要業績

総数 (5) 件

- ・ 塩崎美穂, 翻訳 イブン・スィーナー「子育て」——『医学典範』より——, 東京大学大学院教育学研究科教育学研究室紀要, 第 27 号 (2001)
- ・ 塩崎美穂, 1920 年代における東京市公立託児所の成立, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 第 42 号, 1-9 頁 (2003)
- ・ 塩崎美穂, 「公立託児所」成立期再考——近代日本における公的保育思想——, 保育学研究, 第 42 巻, 71 (175) 頁-79 (183) 頁 (2004)
- ・ 塩崎美穂, 保育事業の公営化と給食思想——幼保の二元的保育制度成立の思想的背景——, 保育学研究, 第 44 巻, 28 (124) 頁-38 (134) 頁 (2006)
- ・ 塩崎美穂, 日本の就学前教育「保育所の整備と量的拡大」, 文部科学省拠点システム構築事業の歴史資料 (お茶の水大学), 97-101 頁 (2006)

◆研究内容

現在、新自由主義 (ネオリベラリズム) に主導される「市場独裁主義」(ブルデュー) は、市場というモデルを、社会の多くの諸関係に拡大適用し、そのイメージに基づいて世界を作り替えようとしている。「効率的な市場への参入を保障する」分野として、ほとんどの公共部門が民営化の対象となり、なかでも郵便、鉄道、教育、医療に照準が定められていることは周知の事実であろう。現在の「小さな政府」が小さくあるべきは、従来<社会>と呼ばれてきたこうした公共部門への関与であり「保育」領域もその例外ではない。というよりむしろ、公立保育所の急激な民営化にみられるように、グローバリゼーションあるいはネオリベラリズムという潮流のなかで、もっとも影響を受けやすい領域の一つが「保育」といえる。

「教育は市場原理にはなじまない」「階層格差をこれ以上広げてはならない」「教育の公的責任を後退させてはいけない」というネオリベ批判は、どの程度有効なのだろうか。「サービス」「ニーズ」という語彙が保育分野で使用されるようになってから、ずいぶん時間が経過してしまった。わたしたちの日常そのものが投資や売買の対象になっている息苦しさ、保育・幼児教育の理念や原理そのものから保育の実践や理論を語ることのできない恐るべき現状は、どうしたら打開できるのだろうか。ネオリベラリズムは自明な成り行きでも、必然的な摂理でもない。ネオリベラリズムを選ぶなかで、わたしたちはなにを手に入れ、そして手放しているのか。保育の歴史をたどり、手放してはならないものを確認したい。

以上のような保育の公共性に関する公的保育の原理研究と同時に、もう一方で、「近代家族」といういわゆる私的な保育空間についての研究が必要である。近代家族は、その成立当初から構造的なもろさを孕んでいるしくみでしかない。この構造的脆弱性にもかかわらず、あるいは「家族の限界」をアカデミックな議論がいくら開示しても、わたしたちは「近代家族」を支え、それに支えられる生活から離れることはできない。しかも子どもの育つ場としては、「家庭」が重要であるという考え方は、子育て・子育ての実態とも呼応して、ますます強く志向される傾向にある。「親育て」のような考え方の広がり顕著であろう。にもかかわらず、(あるいはだからこそ) いまや「家庭」に求められる機能とそれが果たせる機能との齟齬が、ますます顕在化してきている。子どもの福祉を考える場合、その齟齬を埋めることは可能なのか。虐待などの現状をみれば、公私の境界線を引きなおし、近代家族の諸機能を脱構築することなしに、子どもの最善の利益はもはや考えにくいところにわたしたちは来ているのだと思う。幼保の一元化や保幼小連携の推進にみられるような保育行政・家族政策のドラスティックな変容についても、まずは子どもの福祉を視野に入れ、加えてネオリベラリズムやグローバリゼーションが席卷する現代の世界史的な意味をも踏まえ、検討する必要がある。

◆教育内容

「発達過程論」(学部)

人間の一生を「発達過程」の諸相でとらえることを目的とする。心理学、精神分析学、文化人類学、社会学などの知見に学びながら、被教育体験を相対化し、教育学として人間形成／教育／保育について考える作業が中心になる。既存の思い込みを可視化することが課題であり、とりわけ、乳児期の発達過程、保育所保育や家庭保育における子どもの発達について学ぶ。

◆Research Pursuits

In Japan, both kindergartens and day nurseries provide preschool education. Both have educational curriculums and both carry out educational activities everyday. Moreover, kindergartens and day nurseries are not divided by age. The system in Japan is unlike the typical European system in which early childhood education consists of day nurseries for 0-2 year olds and kindergarten for 3-5 year olds. In Japan, 3-5 year old children also go to day nurseries.

However, there are systematic differences. Today, the line that divides kindergartens from day nurseries is the working status of the parents or guardians (Actually, whether the mother is present or absent during the day.) Under the system, newborns to two-year old infants can receive daycare at day nurseries. Dividing the two by age group, day nurseries provide education and care to infants and young children while kindergartens provide education and care only to young children.

In actual practice, day nurseries also provided education. Moreover, if early childhood care is interpreted as group education in early childhood, then it may be possible to say that even children from households in which the mother does not work and is able to care for her children are lacking in early childhood care.

Today, people have come to expect day nurseries and kindergartens to provide regular education and care for children lacking in childcare but at the same time also to function as local child-rearing centers and provide assistance for raising children in Japan.

The theme of research is how we could integrate dual system of pre-school for children.

◆共同研究例

「乳児の「泣き」を手がかりにした、乳児保育および育児における環境の影響に関する調査事業」(乳児保育研究会) 親の育児不安や虐待等の問題が深刻化する中、保育所への期待が急速に高まりつつあり、とくに乳児保育へのニーズは急増中である。そうしたニーズに対応するために、従来と条件の異なるコストをさげた保育所も増加してきている。そうした動向に対して保育の質の低下という視角から危惧の声も挙がっているが、残念ながら生産的にかみ合った議論ができていない。問題は、わが国の乳児の集団保育がもっぱら経験に頼っていて、環境条件や保育方法が子どもに与える影響、家庭育児と保育所保育の違いと関係等、保育の質を判定できる根拠となるデータに基づいていないことである。本事業は、そうした現状に鑑みて、乳児保育の基礎資料を手に入れるための調査、研究を行うおうとするものである。今年度は乳児の「泣き」に焦点を当てている。泣きという行為の中に、育児・保育のさまざまな局面や問題点が集約されているし、子どもの泣きは親の育児不安の最大といってもよい要因の一つでもあるからである。具体的には、泣きの実態とその数値化、それを規定する要因と条件、泣きについての保育関係者の意識、泣き場面での保育の実際、家庭と保育所での泣きの違いと対応の違い等々を多様な方法で探ることをテーマにした。それらを基礎データとしながら、泣きという角度から乳児保育の質や内容、保育士のかかわりのあり方さらには子育て支援のあり方、質などについて方向性を提示することが目標である。

◆共同研究可能テーマ

- ・ 幼保一元化にむけた保育者養成プログラム
- ・ 乳児保育の質

◆受験生等へのメッセージ

人間の複雑さを平易に理解しない。問いの前に立ち続ける構えを学び、そのたのしさをつかんで欲しい。